http://www.edu.pref.kagoshima.jp/ （通巻第１４４８号）

指導資料

鹿児島県総合教育センター

教育相談　第117号
－小，中学校対象－
平成16年５月発行

児童生徒の意欲をはぐくむ教師のかかわり方

保護者や教職員から，「子どもが，学校生活や学習に対して，消極的で覇気がない。どのようにかかわれば，意欲を高めることができるだろうか。」という相談を受けることがよくある。

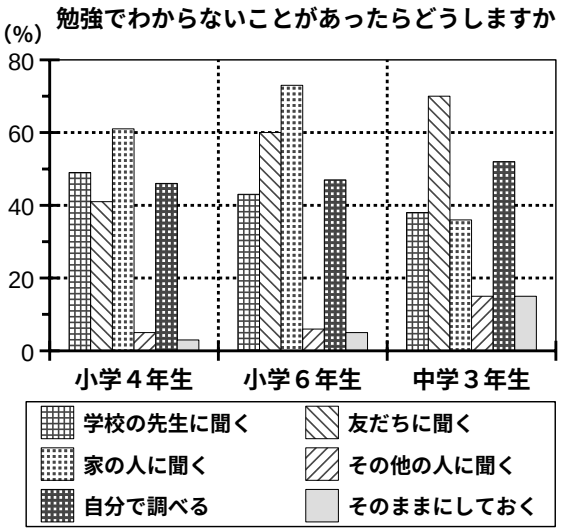
一般的に，人はいくら努力しても解決できない状況に繰り返し直面すると，積極的に問題を解決しようとする意欲が低下したり，情緒的に混乱したりして，いわゆる無気力の状態に陥りやすい。一方，人は自分の努力によって，課題を良い方向に変えることができるという実感や他者との温かいやりとりを繰り返し経験することで，自己効力感を感じることができるようになる。

そこで，本稿では児童生徒の自己効力感を高めるなど，意欲をはぐくむための教師のかかわり方について，具体的な事例を基に述べる。

１　意識調査の結果から

次のグラフは，鹿児島県教育委員会が平成15年４月に「基礎・基本」定着度調査に併せて実施した意識調査の一つである。

勉強で分からないことがあった場合，最も自律的であると思われる「自分で調べる」は，中学３年生でやや多くなって52%である。



一方，分からないことを教えてもらう場合に聞く相手としては，小学４年生と６年生で「家の人」の役割が大きく，中学３年生では「友だち」の役割が大きいことが分かる。「学校の先生」は，小学４年生が最も多く49%である。また，中学３年生の15%は「そのままにしておく」と答えている。

これらのことから，教師は児童生徒が自らの力で調べることができるように学習の仕方を指導するとともに，学習や生活上の悩みについての相談にいつでも応じることができるようにすることが大切である。

さらに，小学校では家庭との連携を考慮した指導をしたり，中学校では生徒が相互に協力しながら学び合える場の設定をしたりするなどの工夫が必要である。

2　意欲的な学校生活を送らせるための対応

学級で，いじめやグループの対立が続いたり，集団生活のルールが守られなかったりすると，学級全体の雰囲気が暗くなってしまうことがある。児童生徒が意欲的に活動するためには，学級は温かく，居心地の良い場所でなければならない。担任は，学級の人間関係づくりを工夫するなど，不登校や問題行動等の未然防止及び早期発見と早期対応を心掛ける必要がある。

そこで，児童の意欲をはぐくむ工夫について，小学校の事例を基に説明する。

事例１（小学４年生）

学級内がグループに分かれ，人間関係がうまくいかず，孤立しがちな児童がみられたり，学習中の発表も少なくなったりするなど，学校生活全般に対する意欲が低くなった学級への対応。

(1)　担任の現状認識と対応方針の決定

担任は，一学期の学級の状態から，学級全体の人間関係づくりを二学期の課題として，次の観点で検討を行った。

ア　児童に自己効力感をもたせるためには，すべての児童に学級集団の一員として，友達と一緒に活動する場を設定する必要がある。

イ　すべての児童が学級における自分の役割を認識して活動し，自分も学級も好ましい方向に高まりつつあるという意識をもたせる必要がある。

そこで，あいさつの仕方や友達の誘い方，友達の頼み事に対する適切な断り方など，社会生活を営む上で必要なソーシャルスキル（注１）を高めることが大切であると考えた。さらに，学級全員で遊んだりするなどの体験活動が必要であると考え，学年主任や管理職にも相談しながら一学期の学級経営方針を修正することにした。

(2) 具体的対応の実際

担任は，学級活動の時間に人間関係づく

表１　朝の会の改善例

一学期の朝の会	改善後の朝の会	具体的な改善内容
1　あいさつ 2　朝の歌 3　一日のめあての確認 4　スピーチ 5　健康観察 6　先生の話	**1　あいさつ** 2　朝の歌 3　一日のめあての確認 **4　昼休みの過ごし方の確認** 5　係からの連絡 **6　エクササイズ** 7　先生の話と健康観察	・　ソーシャルスキルを高めるために，毎日いろいろな人とペアをつくらせて，気持ちのよいあいさつをさせるようにした。 ・　集会係に責任をもたせ，一か月ごとにアンケートを行い，曜日ごとの歌を決めて歌うようにした。 ・　司会の日直が，その日の行事や前日の振り返り，学級目標などを総合的に考えて提案し，学級全員で確認するようにした。 ・　一週間に一日だけ全員で遊ぶ日を決め，遊びの内容を決めるようにさせた。体調不良などで一緒に遊べない場合は強制せず，参加の仕方を工夫するようにした。他の日は，それぞれ自由に過ごせるようにした。 ・　係としての責任感をもたせ，学級全体のために役立つことを提案し，協力を得るための連絡を積極的にさせるようにした。 ・　担任がリーダーとなって，構成的グループエンカウンターのショートエクササイズ(２分程度でできるもの)を取り入れた。 ・　日直の司会や係活動の様子などでよくできたことを取り上げ，賞賛するとともに，一日を全員で協力し合って生活できるように励ますようにした。健康観察は担任が確実に行うようにした。

りを計画して実践した。

二学期の学級目標や個人目標を決める時間に，構成的グループエンカウンター（注２）を取り入れ，楽しい雰囲気で話し合いを進めた。また，事前に行っていた学級の実態に関するアンケート調査結果を提示しながら，学級内の人間関係や係活動などを改善する必要があることを意識化させた。そして，自分たちの力で学級生活をより良くしていくために，朝の会や帰りの会を充実させる方法を話し合わせた。朝の会の改善例は表１に示したとおりである。帰りの会では，一日の振り返りの時間を設定して，朝の会で決めためあての実行状況を個人やグループ及び学級全体で確認し，担任が必要に応じて指導するようにした。

(3)　学級の変容

一週間に一日は，学級全員で遊ぶ日を設定し，昼休み時間に集団遊び（長なわとび，鬼ごっこ，ドッジボールなど）を行った。遊びを通して互いのよさに気付いたり，集団でのルールを学んだりして学級にもまとまりができ，一人でぽつんとしている児童がほとんどいなくなった。

また，学級活動の時間で係活動の計画を話し合わせたことで，共働で活動する場が増え，自己効力感が高まり，係としての責任感も芽生え，学級生活に役立つ係活動が実践され始めた。

注１：社会生活を円滑に営む上で必要とされるコツや技能

注２：共通体験的な活動を通して自己開示，他者受容を促進する開発的カウンセリングの技法の一つ

３　児童生徒の学習意欲を高めるための対応

学習に対する意欲が低い児童生徒は，学習すること自体に興味・関心をもっていないことがある。また，学習内容が理解できない，学習の仕方が分からない，集中して学習に取り組むことができないなどの課題を抱えている。教師は，なぜ意欲が低いのかその原因を見極めて対応しなければならない。

そこで，ここでは中学校社会科での事例を基に説明する。

事例２（学習意欲が低い中学１年生） 他教科に比べ，特に社会科は覚えることが多すぎると感じて，意欲的に学習に取り組めない生徒への対応。

(1)　教科担任の現状認識と対応方針の決定

事例の生徒は，社会科以外に対しては意欲的に取り組んでいたが，社会科については苦手意識をもっていた。特に，社会科は覚えることが多く，つまらないと考えているために，授業に対して受け身的で，学習問題を解決するための調べ学習などへの取組も消極的であった。

そこで，生徒の社会科に対するイメージを改め，主体的な学習を促すために，学習に対する生徒自身の自己評価を毎時間自由記述で行わせた。

さらに，学習相談の中で，社会科に対する学習方法の改善と教科についてのイメージの変容を促した。次のページの表２に，具体的な学習相談場面の一部を示す。

表２　社会科における学習相談の例

教師：社会科の学習でつまらないと思ったり，困ったりしていることはないのかな。
生徒：社会科は，地理も歴史も覚えることが多すぎて，……。授業にも，興味がもてないんです。
教師：そうなんだ。正直に話してくれて，ありがとう。
生徒：自己評価の欄も何を書けばいいか分からないんです。
教師：授業中に，あなたが「西アジアやヨーロッパの品物が正倉院にあるというけど，千年も前の時代にどうやって遠くの国の品物を運んだのかな。」って友達に話していたよね。それを書いたらいいんじゃないかな。
生徒：それは，自己評価ではなくて疑問じゃないんですか。
教師：そう。疑問だよね。でも，授業を通して疑問をもったということが大事なんだよ。なぜだろうという気持ちがあると，その理由を知りたいなと思うでしょう。
生徒：……。
教師：あなたの疑問に友達はどう答えたのかな。
生徒：シルクロードを通じて唐と西アジアやヨーロッパの国々は貿易をしていたことを資料集を見せて説明してくれました。
教師：その説明を聞いてどう思ったの。
生徒：へー。よく知っているなと思ったことと，友達に教えてもらえて，うれしいでした。
教師：そう。うれしかったの。そのことも自己評価に書いてみたらどうかな。
生徒：それなら，少しは自己評価も書けるような気がします。　　（後略）

(2)　生徒の変容

社会科の教師は，事例の生徒に対して時間を見付けては，相談を繰り返した。生徒は，教師との学習相談や文章表現による自己評価を重ねることによって，理解した内容や疑問点への質問，予習・復習の仕方や学習方法などについてよく振り返ることができるようになった。

そのことによって，生徒の社会科に対する暗記するだけの科目というイメージは薄れ，自分の力で調べていけそうだという自己効力感が高まったことで，学習への取組も積極的になった。

4　家庭との連携

学校生活に意欲をもって取り組めるようにするには，学級通信や週報など学校から家庭向けに発信する情報媒体を有効に活用し，学校での学習や過ごし方の様子を児童生徒はもちろん，保護者にも具体的で分かりやすく伝える必要がある。

また，学級ＰＴＡ等でも児童生徒の意欲を高めるための取組を話し合い，連携を密にして実践することは重要である。特に，小学校では勉強で分からないときに家族の果たす役割が大きい。それだけに，学校での授業の進め方を説明し，家庭学習ではどのようなことに注意する必要があるのか，保護者として見届けをどのようにすれば良いのかなどを具体的に話し合い，学校と家庭が十分に協力し合うことが求められる。

なお，個別の支援が必要な児童生徒の保護者に対しては，学校が保護者の都合を考慮して特別に相談日程を設定し，早めに教育相談を行うことが大事である。

児童生徒が意欲的に活動したり，学習したりする学級では，分かりやすい授業が行われ，居心地の良い雰囲気がある。教師は，常に自らの学級経営や教科指導を振り返り，児童生徒の意欲をはぐくむ努力をしたいものである。

【参考文献】

下山　剛『学習意欲と学習指導』1995　学芸図書株式会社
安彦忠彦・各務原市立稲羽中学校　『自己評価で授業が変わる』1997　明治図書

（教育相談課）